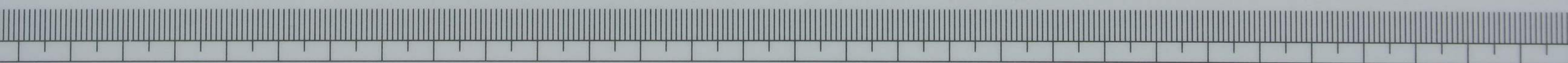




集 笛 暮

作 介 淳 田 薄



60

65

70

75

80

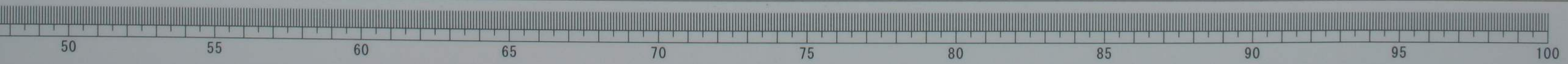
85







作介淳田薄





暮

笛

集

幕

簡

集

薄

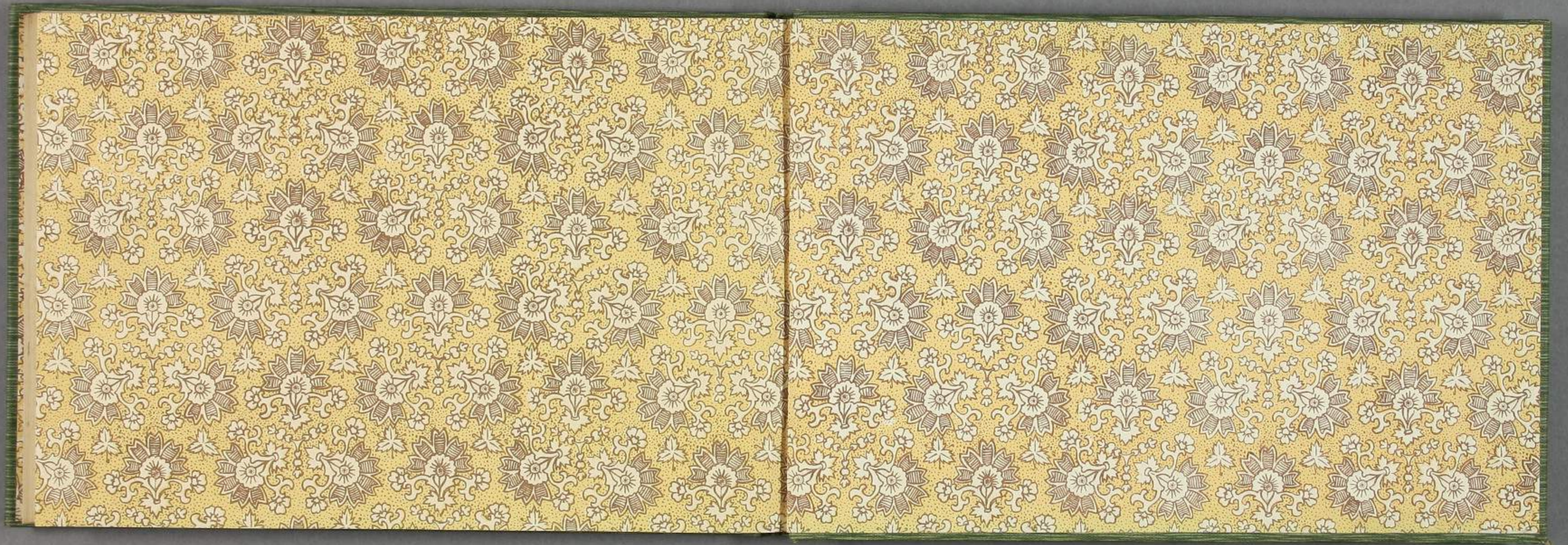
田

淳

介

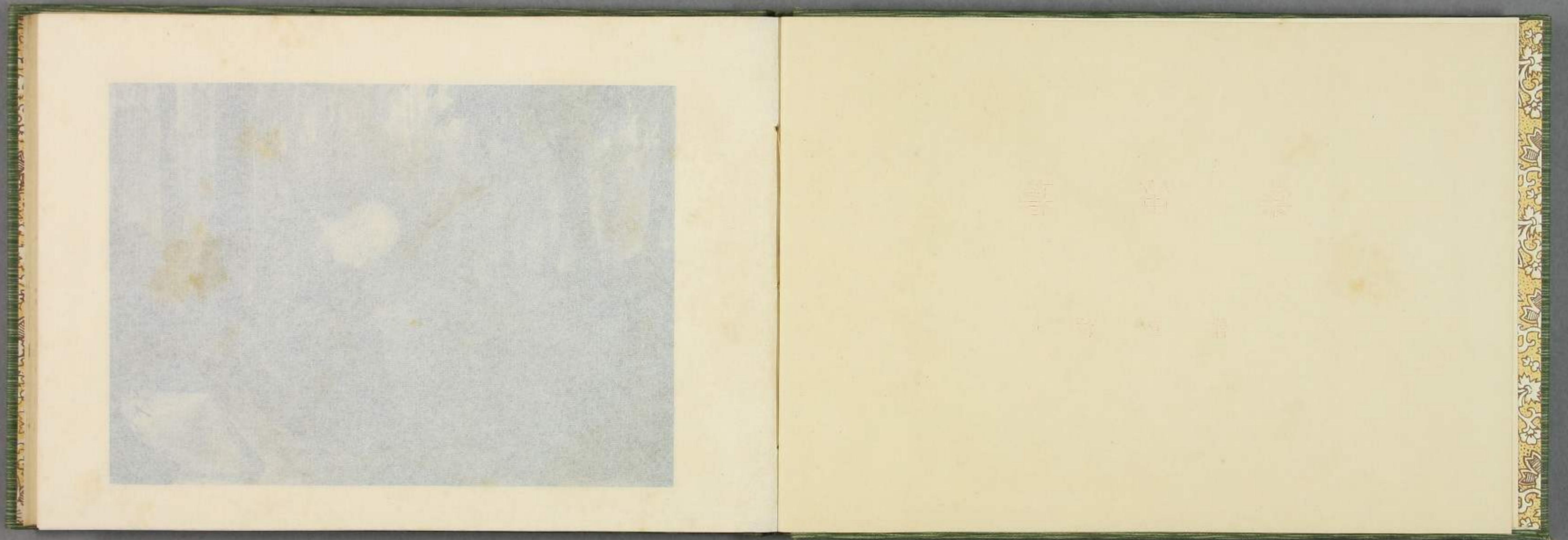
著

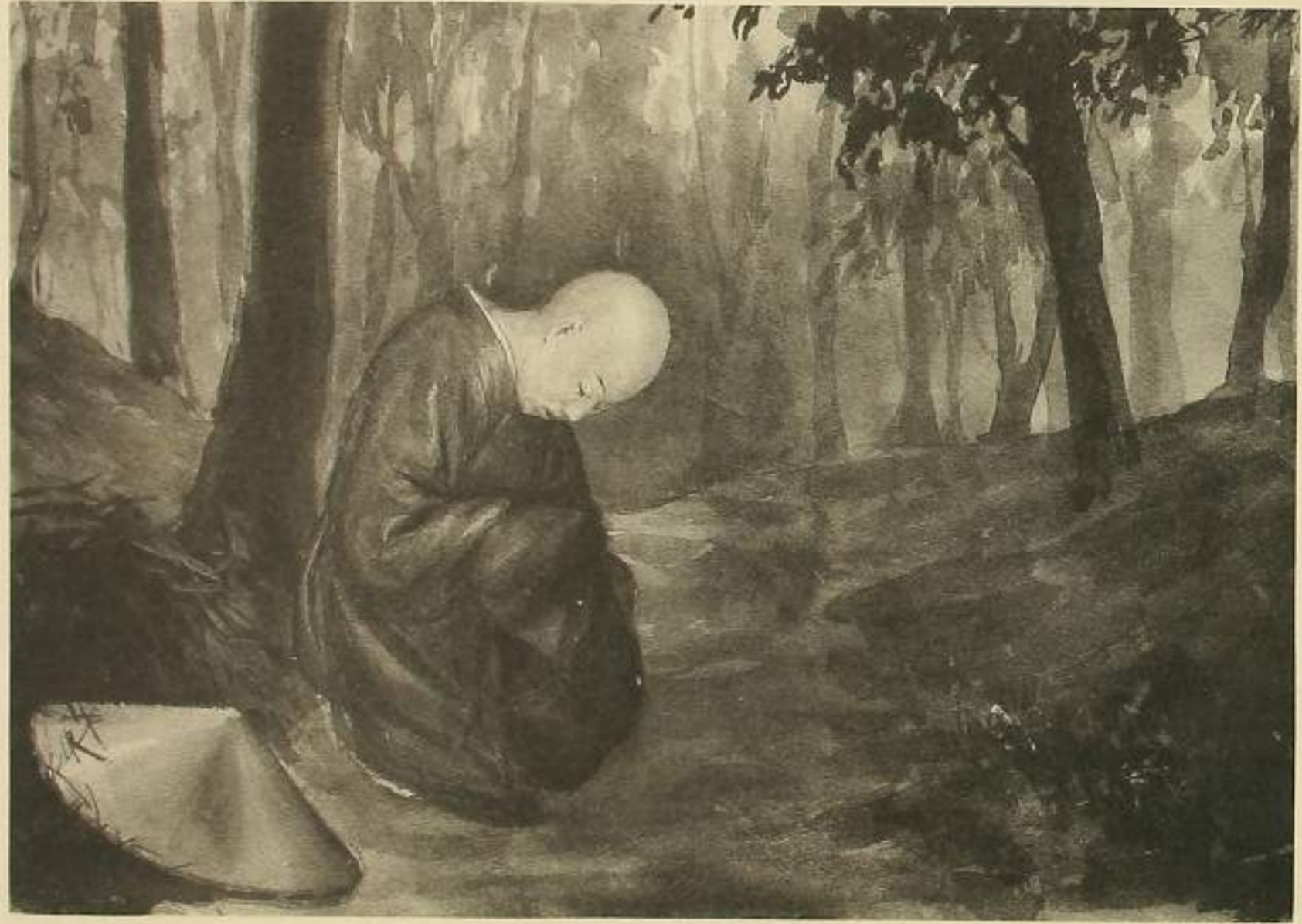




集 笛 暮

作 董 泣









はしがき

こは未のとしの暮より亥のとしへ
かけての作なり野調もとより人に
誇るに足らずといへども吾胸いた
めたるいと子よと思へばうち捨
てんことの情なうて茲にひと卷に
拾ひあつめしばかりぞ
こを世に出すにあたりて親しき友
平尾不孤金尾思西の二子かねもご
ろに盡されしなさを深く謝する
なり

亥の歳初秋

泣菫しるす

吾は牧童
夕暮吹き
すさぶ笛
の音の聞
く人もな
きを、恥少
なければ
と、自から
喜ぶのみ

再版にしるす

去歳のくれこの集成りてはじめより打ち
誦しけるに如何はしき句など少なからざ
れば再版のをりには力めて改むべしと心
に期しけるものをさて今となれば思ひし
半ばもえせず未熟なりとは知りながら雌
黄れとし兼ねるがいと多かるそのかみの
興を損はんを怖れてに非ずまたく吾才の
進まざるによるなりかなしきやこの事
友の多くはれのく稿の成りたる期を
問ひ玉へり鶴鶴と絶句の大方は未と申詩
のなやみ兄と妹百合花娘可笑しやは成山
雀獲物秋懐は亥他は酉の作とのみはわれ

覺え居れり斯ばかりの歌心高き人は引き裂きても捨てぬべし世に出すぞ中々に面伏なるべきを友は再び手にとり賜はんとにやあし書を公にする人誰し願みて耻なしと言ひ得るやしるして戒となすなり

子の歳

きさらぎのなかば

目次

詩のなやみ	一
鶴鶴	五
冬の歌	七
古鏡賦	九
虎が雨	一四
村娘	一六
暮春の賦	一八
鶴鶴の歌	三三
兄と妹	三四
大原女	四九
盃賦	五〇
絶句十九篇	五五
一 山雀	

二	獲物	五
三	琥珀	五
四	雛祭	五
五	秋懷	五
六	雲	六
七	蟋蟀	六
八	星	六
九	鐘	六
十	鬢の毛	六
十一	紅涙	六
十二	江戸河にて	六
十三	玉腕	六
十四	紅絹袖	六
十五	螢	七
十六	蟋蟀	七

十七	夕	七
十八	眞珠	七
十九	桐葉	七
二十	尼が紅	六
二十一	遊子	二
二十二	巖頭にたちて	二
二十三	春の夜	二
二十四	關山曲	二
二十五	旅客に與ふ	二
二十六	壁にそめたる	二
二十七	鄙ぶり	二
二十八	ふなうた	二
二十九	蟹少女	二
三十	粉屋の女房	二
三十一	娘をかしや	二

暮笛集

薄田泣董

詩のなやみ

遅日巷の塵に行き
力ある句に
くるしみぬ

燕の賦
百合花
秋の歌
木曾川にて
琵琶湖にて
加古河にて
楫保河にて
華燭賦

一三七
一四三
一四四
一四九
一五二
一五三
一五五
一五九

消^きゆ^るに^に似^にた^るる
 よし答^{こた}ふるも
 柱^{はしら}なき細^こ緒^{いと}を^を如^{ごと}く
 薄^{うす}情^{なさけ}人^{ひと}に
 物^{もの}問^とふは
 髪^{かみ}はつれたる子^こを
 さば價^あなみぞ
 詩^{うた}に瘦^{すく}せて

二^{ふた}羽^はの雀^{すずめ}は^はか
 あ^あ田^たに^に飛^とんで
 情^{なさけ}あ^ある子^この^の堪^たへんや
 石^{いし}を^を包^{つつ}みて
 玉^{たま}といふ
 深^{ふか}く洗^{すす}め^めと^と聞^きく
 詩^{うた}は^は大^{おほ}海^{うみ}の^の狩^{かり}

こゝに風流の
われ膝折りて
秀才あれ
學ばんに

こゝに有情の
われ手をとりにて
少女あれ
詢らんに

世に秀才なく
われ唯ひとり
少女なく
物狂

雨垂柏子
句を切りて
無才を知るよ
今こゝに

鶴 鴿

鶴鴿雌雄下りて幾園に遊ぶ。
人あり石を投げて追はんとす。
樹下に立ちてこの篇をつくる。

止めよ若者石とりて
かの鶴鴿を追はんより
拳に巳が額を打て
禍鳥其處に巢くへるに
小石踏み踏み瀬をわたる
無心の遊び罪なふか
さは先づ垣に花を摘む

隣りの稚兒を蹴るべきに、

雌雄尾をふる首をふる

歌ふ姿を羨むか、

往いて木暗に夫と語る

君が妹を脅かせ

花は踏まれて蹶に

薬の粉ちるも微笑むを、

人は行きすり、故もなく

鳥叱らでは過ぎ得ざる、

吾あに是に言よせて、

友罵しるを好まんや、

鳥に情なき人の子は、

遂に隣と関がでや、

やめよ若者かへるさに、

妹訪ひよりに語りみよ、

君有心者と喜びて、

両の腕を肩に委ねん、

冬の歌

冬は来れり山越えて、

里に入りたる旅人が、

散り透く森の下道に、

鹿の角得たる幸聞きて、

樵夫空兵衛朝明を

山に駆けたる噂あり、

薄き日影に茶の花の
こぼれ咲く頃蕪煮て、
武者物語ひもとくに、
矢開糸がく調に乗り、
手柏子かるく打ちふれば、
妹背に立ちて興がるよ、

夜か子刻の鐘鳴りて、
市姫領を引き去れば、
小狐降りて下京の
月に牙えたる霜をふみ、
鳩もやあると唯獨り
數珠挽寝たる戸をくいる。
吾鷹狩の戻り路

手がへり待ちて立てる時
流人領土を去る如く、
吹き倦んたたる北風の
後姿さむう悄々と
森をめぐりて行くを見ぬ、

かの銹山に年木伐る
斧の響きか一しきり
谿を叩いて静まれば、
世は寂寞の手に歸して、
いかめしい哉雲二十重、
また雪貢うて峯に立てり、

古鏡賦
斧に倒れし白檀の

高き香森に散る如く、
薄衣とけば遠き世の
ふかき韻を身に逼る。
向へば花の羽衣の
袖のかほりを鼻に嗅ぎ、
叩けば玉の白金の
冠冕を弾く響あり。

こは古錢往にし世に、
額白かりし上臈の
戀得で髪を裁ちし時
投げてしものと君も見よ、
横さにかゝる薄雲の
曇れる影も故づきて、
頼もしい哉祭壇の

聖き姿をうち湛ふ。

千載鏤の鈍ばみきて、
冷わたる面にさはりみよ、
花くだけちる短夜を、
瞳子凝らし少女子が
玉の額をながれたる
熱き血汐の湧きかへり、
春の潮と見る迄に、
昔の夢の騒ぐらし。
亂心地の堪へざるに、
泡咲く酒の車だに、
渴ける舌にふくませよ、
袖に抱いて人知れず、

深野の末に踏み入りて、
妻覓と見るか物狂
背叩いて面撫で、
有心者得ぬと歌はんに、
宿る人靈のひいらかば、
怨みある世の夢がたり、
名に戀しれど嫉みある
女神女子に幸貸さず、
人の情の薄かるに、
細き命をつなぎわび、
泣いて逝きたる上臈の
秘めし思を悼まんか。
あ、幾度か若き身の、

狂氣をこそは望みしか、
今ど興あり怨みある、
其世の紀念古鏡、
これ吾襟に藏め得ば、
よし京童は嘲るも、
世の煩らひを打ち捨て、
智覺なき身と化しもせん、
なう古鏡このあした、
汝を抱いて嘆く身の
述懐は夢か屋氣樓
それにも似たる幻か、
孰れ覺むべきものならば、
儘よ短かき晝の間を、
飽かぬ陸にあこがれて、

悲しき闇を忘れまし。

虎が雨

大膽の虎女曾我十郎に別る涙變して雨なるされば五月二十八日多く雨ふるをかく名づけ來れりわれ一とせ此日此地をよぎりてよめる

胸かはきたる人の世に、
此はなつかしや虎が雨、
われ名を聞いて恨ある
世の情なさを忘れたり。

磯飛ぶ可きかの畔に、
歌うてかへる子を呼びて、
思情や湧くと觸れてみる
手心さとくさぐらばや。

そは野の草に注ぎても、
花くれなるに吹くちふを、
里の小女童年二七、
若し戀ひすやと思ふ故。

あかき涙のこほりたる
情の雨と名を聞けば、
光りさびしきこの夕を、
髪もしといに染よかし。

額におつるしたりに、
濁ける舌を濡らせて、
色香なき世の煩ひを、
しばし忘れん心なり。

村娘

春ゆく夕白藤の花
花ちる蔭に身をよせて
泣くは行末さだめなき
世のならはしを思ふもの

知らずや薄き花びらに
春の日を焼く香あり
見ずやか細き鬢莖に
かなへをわぐる力あり

路せき走る旅の人
しばし木暗に立ちよりて
冷たき胸を叩く手に

など若き身を抱かざる

誰に語らん和肌

指をさはれば此は憂しや

潮に似たる胸の氣の

浪とゆらぐを今ぞ知る

春経てさふる酒斐には

色濃き酒の湧くものを

瘠せし腕に血も冷えて

苦き涙をぬぐふかな

これは習慣にまた
薄ら衣服を裁ちきれど
もろき命をおもひみて

たゞむに惜しき染小袖

神よ情ある人の子に、
盲目をゆるせゆく春の
長きうれひを眺めては、
か弱き胸の堪へざるに

暮春の賦

冷たき土窟に醸されて、
若紫の色深く、
泡さく酒の盃を、
吾唇に含ませよ、
暮れ行く春を顔きて、
細き腕の冷ゆる哉

心周章つる佐保姫が
旅の日急くかこの夕
人は夕飯に耽る間を、
花そここゝに散りこぼれ、
痛ましい哉春の日の
快樂も土にかへりけり、

垂るゝ若葉の下がくれ、
亂れて細き燈火に、
睡凝らして見入るれば、
萼にぬれる葉の粉や、
花なき今も香を吹いて、
残れる春を焼かんとす、
足にさはりて和らかき

名もなき草の花ふみて、
思ふは弱き人の春、
蹴粗き運命に、
戀の常花ふみさかれ、
憂しや、逝く日の無くてかは
暗まだ薄き彼方より、
常若に笑ひ星の影、
智恵ある風にさらめきて、
夏來と知らず顔付よ、
今冷やかに見かへして、
吾嘲けるを、堪へじな
耳をすませば薄命の
長き恨か、暗の夜を、

くだけて落つる芍薬や、
吾も沈める此夜半を、
毒ある花の香に酔ひて、
消えて人靈と化せん哉、
かゝる静寂をことならば、
心ある子がものすさび、
顔なく絃にふれもせば、
弱き我身はくだけても、
琴ひく君が胸の上、
涙のかぎりかけましを、
あゝ恨みある春の夜の
ほそきあらしに熱情の
焰な消しぞ、木がくれに、

のがれて急ぐ佐保姫が、
旅路を阻ふ蟲術の
息吹とはかん血汐なり。

鶺鴒の歌

吹草祭の日は寒く、
鍛冶が女房友もなく、
ひねもす窓に居凭る時、
軒端づたひにこそつきて、
掛菜をそゝる音きけば、
鶺鴒來と知られけり。
樵夫の娘爪先を
爐にあたゝむる雪の朝
吹爐聲を近く聞き、

情郎戸に呼ぶと駈けいでよ、
可憐や軒に立ちくらし、
凍ひて泣きし談あり。

吾今朝山に分け入りて、
谷の小陰に唯一羽、
鋭き嘴に萱さきて、
巢をあむ振を認めしが、
かへりて妹にさゝやくに、
猶吾聲をはかりぬ。

なう鶺鴒木づたひに
ひとり興がる歌きけば、
吾夏の日の野の鳥の
誇る羽振も忘れはて、

鏡蟲啄みて飛んでゆく、
細き姿をかいまみる哉

兄と妹

「……どこへに照りわたる天つ日の
もとに御身の幸福にあるべし、然り
われの心を祈るべきぞ」

兄

冬の日背をあたゝめて、
南の窓のたゝすまひ、
胸和ぐる心地すに、
来ずや暫しもなう妹
厨女行いて君ひとり
燭細るまで針づとめ、
今朝人訪はず手とりて、
心なぐさに歌はんか

妹

やさしの君が語かな、
朝食の皿は注ぎたり、
春着の袖はなほ裁たず、
しばしは爰にかたらんか、

厨女お竹行いてより、
抱腹笑聞きにねど、
君が情ある言の葉に、
憂慰むる妹が身ぞ。

兄

世に可愛しきは妹の
針とる傍に侍りて、

誦し出る戀の物語
調子剛しと指ざれ

そは此作者を目をやみて、
妹が襦袢白茶地の
丁子色柑子色にまがへばと
軽く手をうち笑ふとき

妹

世にかしきは吾兄の
「縁」音する、行き見よと、
手にとる書は讀みやめて
我顔色をながむるに、

そは梁走る小鼠の

餅ひく音よ心せで、
早讀みつけとうち笑みて、
君が腕にすがるとき

兄

春の夜ふかく月影に、
庭の樹間をさまよへど、
歌よむ興もおこらぬに、
琴ひけ妹とうながせば、

アイと琴とり柱をわきて、
奏でいでたる一曲の
あまりに調の切なるに、
睫毛うるみし夜もありき

妹

琴ひきさして見かへれば、
火影にそむき君泣くに、

「何悲しき」とよりそへば、
「感極る」と忍び音に、

「何故」「調よきに」「拙なるを、
せめて叱れ」と耻らへば、
無言に胸をかきいだき、
哀れや夜たゞ寢でありき、

兄

夏朝早く水くひと、
髪を抱いて走りしが、
戸に泣く聲に駆けゆけば、
「許せ水髪砕いて」と、

砕くも儘よ唯泣くな、
髪には惜しき涙をと、
言ふに可憐やしやくりあけ、
すかりて泣きし人は誰れ、

妹

秋の日小犬かくれきて、
手馴の兎捕られぬと、
歌をもよまで窓に凭り、
面杖ついて歎けるを、

朝葉つむとて圃にゆき、
芋の葉かけに耳を見て、
抱きかへるに兄が身の、
額づき謝せし日は何日か、

兄

笥子とりこんと夕闇を、
北の一間に走りしが、
「幽霊耳ひく守りて」と
髪ふりみだし叫べるに、

われ燭とりて駆け来れば、
「憎や此は琴」恐ぢて見し
姿耻ぢてか、口細め、
燭吹きけして隠れしよ

妹

朝道遙の其の一日、
葡萄の棚の下かけに、

戀歌よまんと勇みたち、
柏子とりゆく勢を、

可愛しや、石に躓きて、
眉毛ひそませ怒るとき、
われ葉がくれの一房を、
摘みて詫にと勘めしよ

兄

昨夜姫桃ちりこぼれ、
風香をのする春の日を、
丸鬘姿あはかにて、
君窓による夢みたり、

七、春経たる樟樹の、

若葉そろうて立つ如く、
君鬢づらの撓むまで、
髪ふさやかにたけよりな、

妹

いはい巫覡嚴らしく、
敵古人に説くに似て、
夢といつはる吹聴語、
鼻うそやぎに其と知る。

昨日むすびし蝶々の
はや解けがちの風見ても、
兄よ再び女房の
心化粧はいはすあれ。

兄

世に名も高く響きたる
秀才の友にめあはせて、
げにふさはしき花妻と、
歌ひはやさん日は何日か。

君才敏く情切に、
顔赤らめな光ある
廣き書齋の鍵とるに、
何耻かしき身ならんや。

妹

われ身弱くて年若く
唯世にいで耻あるを、
額青白き博士等の
ひかる瞳子に似堪へんや。

希くはいつまでも、
君歌よむと文机に、
まどろむ夜半を衣かけて、
手にとる筆を去らしめよ、

兄

袖に秘めたる手を見せよ、
これ輝か、寒き日を、
可憐や獨り米磨ぐと、
煤け厨屋に水釣りて、

あゝ願はずや春の夜を、
金屏ひくき廣前に、
藤紫の袖をりて、

なよび姿に舞はんとは、

妹

否よそにして遊ばんは、
家に勞るゝ身に若かず、
興ある旅に行かんより、
つらくも吾はかへらんか、

花賣娘名はお京、
都に三歳聲かれて、
『うき夢見ぬ』と泣くみれば、
あはれや鬢もほろくと、

兄

知るかまことに世は然り、

君葉がくれの花の身を
いかに手折りて小狐の
野道におくに忍びんや

緋桃白桃そのかけに
愛と誠の神やどる
無何有の郷の世にあらば
君ゐて其處に走らんを

妹

世に無何有なく絶えてなく
修羅永劫についかんを
せめては兄と唯ふたり
生れし家に止まらん

見よ鳩ふたつ飛びあぐみ
隣りの家根にかへりきて
喜ひ鳴くよ巢は空の
木よりゆかしと知るや君

兄

殘んの城と立ちこもり
誠をたのむ團欒をも
あはや無慙の大浪に
まかれも行かん人は此處

蛇にまかれて悲鳴する
弱き雀に似たらすや
あゝ石とりて誰かよく
かの鎌首をくだかんか

妹

友をうしなひ唯ひとり、
夕ぐれ坂に鳴き細る、
若き羊もかくばかり、
沈みて物を思はんや、

更に興ある事様に、
君が思慮をめぐらせて、
頼の可愛味罪もなく、
共に笑壺に入らしめよ、

兄

見よ、この蛇の行くところ、
悪しき臭氣に氣は汚れ、

善き、美しくしき、正しきは、
背さしむけ逃れ去る、

唯闇につく密事、
盗み、詐り、小賢こき
侮り、驕り、似而非者の
偽善ぞ彼が跡ふむよ、

妹

妻もつ水夫は遠く去り、
歌聲細る島蔭に、
日暮れて落つる夕汐も、
かく悲しげに見ゆんやは、

兄よ、御身が顔色の、

あまり病者に似たらすや、
肌さらすな、朝北の
や、庭の樹に吹きたつに。

兄

汚れし毒は血に入りて、
世はさながらの地獄なるを、
脆き身ひとり影もなく、
涙の谷にゆかんより、

むしろ驚とも身を化して、
腐れはてたる人の子の
胸裂いて恨ある
工匠の手をも咀はんか。

妹

歎きの附子矢身をはみて、
人の堪へんや、請ふ泣くな、
われ乙女子の術知らず、
慰めもなく迷ふのみ。

兄よ、ほゝゑめ、門の戸に
といと音せば何とする、
日影も高くさし照るに、
爰に歌うて畢らんか。

兄

歌ふと聞けばなつかしな、
歩み倦んずる旅の日に、
樹蔭見るより嬉しきは、
「聖なる」歌を思ふとき。

よしさば歌へ、去年の春
野に興を得て走り書
「妹許ゆけ」と、龍犬の
首にむすびしかの歌を。

妹

われもそをこそ友袖子、
一日袂にさぐりみて、
美ましやと目を細め、
三たびも誦してかへりしよ、
君なぐさめん戯れぞ
誦し出る調のわなゝきて、
よしさゝ啼に似たりとも、

ゆめな笑ひぞ、吾兄よ、

(妹歌ふ)

古酒壺の
裂け目より、
したたる露は、
巳が身か。
甘しと嘗めて、
誰盃の
稱ふれど、
誰盃の
ものとせず。
爰に自然と、
妹の、

深き慰籍の
なからんか。

むしる背いて、
海にゆき、

思を波に、
消さましを。

春の日小野の

裂けし小笛の
片拾ひ、

息吹きこめて、
なぐさむに、

ふと吾胸の
ゆるぎたる。

世の市人の

あまりに音の
やさしきに

若葉の蔭に、
尋ね来て、

妹とふたり、
吹いて見る。

吾笛とれば、
君たちて、

笛ふえなげうちて、
 物もの狂くるに
 得えしよ、不ふ斷たに
 世よに見みぬも幸さいとめても、
 世よに見みぬも幸さいとめても、
 胸むねに
 あゝ妹あいらよ、
 縁ゆかりあれば
 かくは手てをと
 相あししたへ、
 あゝ妹あいらよ、
 來きん世よにも、

かの羽はね衣えの舞まふ
 目めは大海おほうみの
 光ひかりりすいしく、
 足あしは蕈たけのこの
 鹿かの子この如ごとく、
 舞まひのぼる、
 輝あざけり、
 君きみは誰たれれ、
 飽あなるかなや、

一ひとつ契あひだりの
兄あにをこそ

笛ふえとりあけて
吹きいでぬ

調しらべにあらりと
朗あざやと

見みよ美うらくしき

歡こゝろ喜きのまのけに
あらはれぬ

君きみ喜よろこべ
何なにかまた

世よのほらひを
思おもふべき

無む才さいならんや
われはよく

妹いなぐさむる
すべをしる

無む才さいならんや
われはよく

妹いなぐさむる
すべをしる

大原女

行い方へ語かたれな大原女おほはらめ

齒菜の手籠に何盛れる、
京の旅人渴けるに、
桃かさは君與へすや、

君が跡ふむ龍犬の、
名は何「斑」と善き名なり、
斑も木かけの欲しと見る、
しばし來て坐せなう少女、
手籠木にかけ野に伏して
鄙歌ひとつ優にこそ、
さは都女の數寄こむる
鬢の風情をかたらんか、

盃 賦

“Sylvan historian, who canst thus express
A flowery tale more sweetly than our
rhyme” — Keats.

これ語り部か岩窟に、
隠者の背を見る如く、
深く鉗めどおのづから、
胸にをしふる物語、
指にいだいて希有がれば、
裾に秘色の鏤うきて、
常珍なる香を吹くに、
此は逸品と今ぞ知る、
剪裁かをる夏の夕、
燈火かやく新室や、
耻を含める花嫁が、

紅の香高き唇に、
汝か縁すこし打ち觸れて、
胸に湧きづる歡樂の。
高き潮にほも堪へず、
まみ細むるを見ざりしや。

厨女さめて寐惚顔
鼠子追ふも絶わたるに
興得て律を探らうと、
四更まだ寐ねぬ詩人の、
火影に汝を需め得て、
したり顔せし日は何日か、
そは女の神に額づきて、
戀歌よむ子と吾も知る。

秋の夜月の高き頃
壑道問ふと庵に入り、
戦を語る落武者が、
はや殿軍も河越はん、
さらばと長き矛とるに
今一つぎと老僧の
行手の幸を祈りつゝ
汝捧ぐるを見ざりしや。

友戀ひ病めり願くは、
木暗に眠る夢の間を、
汝が肩越しに溢れては、
泡さく酒の車だに、
疲れし胸に注がせて、
酔醒訪はぬ時の間も、

ひとり興ある物狂
古るき愁を捨てしめん

あゝ盃よ、永き世の
鏝を帯びたる汝底に、
世の歡樂を染めいでよ、
秘密をえがく永劫の、
遠き光を透かしみて、
吾わが命のいまさらには、
意ある如きに驚いて、
獨り瞳子をこらすなり

絶句 十九篇

山雀

"All that ever was

Joyous, and clear, and fresh, thy music

doth surpass;"

— Shelley.

鳥鳴く柿の實紅をさして、
夕日に浴びたる上枝高く、
首ふる尾をふる興に入りて
歌ふよ、山雀律も優に
秋姫今日より峯を下りて
麓の林に木の實盛れよ、
晩餐のかへるさ道を遠み、
翼の倦まんも不憫なるに、

道ゆく旅人こゝに來たり、
赤丹穂に見る額もあけず、
扱なは肩の荷解かであらば、
野守よ行手の路を貸すな、
妙なる歌にも疎き耳は、
善き子の頭ににれかるべしや。

獲物

「若うて仲間と戀に闘ぎ、
少女が日撰に時を期して、
獲物を占にと銃を荷ひ、
秋山木ふかく勇みゆきぬ、
葉かけに角みて狙ひよれば、
こはこれ寝る雌の夢や守る、
目の色うるみて雄鹿立つに、

戀ふれば斯くかと打たで去れり
少女子迎へて熊や射たる、
敵は粗毛の猿を得ぬと、
問ひよる顔みて銃を折りきり、
語るは空兵衛老いし樵夫、
禿げたる頭に露を浴びて、
曉今なほ山路はしる。

琥珀

琥珀にかくる、羽蟻が身の
きたなき縁を逃れいでよ、
透き入る眞玉の宮に眠る、
不滅のいのちを知るか君は、
都に富める子綺羅を着ても、
猶身に榮ある思なしと、

ひねもす南の窓にもたれ、
可憐や憂身を恨みなげく。
あゝ君樹蔭の草をふみて、
若さが手をとりに語り行けな。
さば世に愛こそ君をまもる、
琥珀の城とも思ひ知らん。
何名を煩らひ智恵にこがれ、
敗るゝ縁に身を委ねん。

雛祭

青磁に亂るゝ糸柳の
若芽をきざめる片枝がくれ、
かざれる雛の玉の殿を、
誰が子か仰いで獨り笑めり、
紫玉をちらせる金の冠。

龍頭を彫りたる劔太刀の、
花なる御衣を透いて見ゆる、
壮なる姿を君や戀ふる。
春知りそめたる糸柳の
媚むて見ゆるも哀れなるに、
緋桃を浮けたる瓶子あけて、
沈める思に注いで見んか。
彌生のみ空と若き命
いづれか白日の夢に似ざる。

秋懷

山森畑寺遠き牧場
落つる日ゆく雲歸る樵夫
孰れか一種の鏝を帯びて、
暮天の繪様に趣味を見ざる。

今句を得んとて路に立てば、
陣觸聞いたる武者の如く
心利騒いで得堪へざるに
田の畔踏みきて草に伏せり。
若し夜の幕の落つる迄も、
歌得で小道に迷ひ居らば、
無才ぞ牛飼ふ群に入りて、
明日より文集手には取らり、
野がへり裂けたる笛を吹くも
詩を得ぬ不興に比せば如何に。

雲

遠島がくれに走る舟の
波間にうする、眞帆と見わた
黄色に染みたる放れ雲の

秋の日風なき空をわたる
見よ今朝明遠く飛びて、
目路さす彼方に細り行けど、
夕暮島根に雲はかへり、
落つる日抱いて其處に眠る。
知恵猶とゝかぬ大空には、
物皆はかなく人は見れど、
放れば跡なき浮雲にも、
常盤に絶わざる命ぞある。
あゝかの漂よふ天つ領巾に、
此世の秘密を染めて見ばや。

蟋蟀

"The poetry of earth is never dead."
——Keats.

姉女眠りて厨屋さむく、
小鼠古巢にこもる夜半を、
冷む行く竈に友もあらで、
節々のうからに蟋蟀鳴く、
かすかに答ふる巳が歌の、
愉快か興がるいろも見えて、
眉の毛ふれるよ、鳴きつ飛びつ
無心のたはむれ姿優に、
更け行く半夜の影を惜み、
自然の快樂の得たさ見たさ、
燭とり窺ふ吾を何と、
此は又おどろき飛びて行くか
さば今隠れむ、またも細く、
唱へよ竈に君が歌を。

星

雲井の流れを吹き落して、
天風高嶺をわたる時も、
揺れず流れず星は立てり、
誰れ今自然の力否む、
神代の開けに星はうまれ、
氣遠き世界を下に踏みて、
戦ひ勝ちたる武者の如く、
千載きららか空にかゝる、
今問ふ理想は消ぬべきか、
見よ彼の悪魔の走る所、
顔青ざめたる瞳子うする、
地上によるばひ呻き居るよ、
魔か名を我といふ然らざれば、

詩人ぞかくやは愛きに泣かん

鐘

欲覺冊長鐘
令人發深省 一杜甫

鐘鳴る九日月は落ちて、
暗闇領する八となれば、
四隣の寂寞人も堪へで、
鐘樓にのぼるか歩み遅々と
鐘鳴る夜の神時を知りて、
信實人眠れる門に立てば、
驚きかくるゝ人靈木魂、
歸途にまよふもかゝる時か、
うてうて再び三度四度、
三軍根城にせまる如く、
鐘の音般々ひびきわたり、

天地應トてどよむ時ぞ、
身はこれ詩人獨り覺めて、
夜すがら黙思の興に入らむ。

鬢の毛

か細きはつれも胸にまきて、
人の子とらへん力ありや、
梳ればかすかに肩をうちて、
髮八尺櫛にながる。
その名は「縁子」遅日々に、
花笑見うとて門に立てど、
戀ふる子あはれむ色もなきに
袖口噛みては泣いてかへる。
雨の日ひねもす獨りたちて、
心にゑがくはなよび姿。

燕も巢に入る夕となりて、
むかへば悲しや眉を白み、
つれなの鏡を壁になけて、
しのびに泣くかな薄き縁を。

紅 涙

歩めば橘袖にこぼれ、
かへれば姫百合裾に折れて、
往來憚かる山路來つゝ、
嗚呼また思ふは妹が上か、
巖根にこもれる荆棘がくれ、
いならぬ香を風にしめて、
隠かに萎るゝ花の如く、
怨むもかひなき己が身かや、
葉としにさしいる朝日影に、

むすべは悲しや、吾涙の
唐紅なる色にしみて、
眞玉手さしかへ眠る夜半の、
亂るゝ髪をも染めぬべきに、
色なき石のみぬれて見ぬ。

江戸河にて

織雲紫長くながれ、
落つる日黄ばめるこの夕暮、
おもむきある哉筏浮けて、
舟人河瀬に軽くさせり、
静けき夕の心やりか、
欸乃一ふし歌ひさして、
笑めるよ、若い子水馴棹に、
くだくる小波をあとに見つゝ。

民皆煩らふ空のもとに、
自然の愛子か君は獨り。
赤丹穂に見る顔の色に、
心の平和さやに知らる。
詩人妬んで名残つきま、
暫しはたゆたへ、やよや舟子。

玉腕

朝明一群鱗しるく、
淺瀬に走せ散る鮎と見て、
まとへる綾羅色をわかみ、
透いても見ゆるや玉の腕。
葉がくれ桃の實探りよるか、
人目を煩らへ腕見ゆと、
母戸に呼ばへる聲を聞きて、

垣間見とれしを誰と知るか、
夕空虹の環横にきりて、
遠雲がくれにわたる鷲の、
猛なる翼もむしる捨てん。
眞玉をのべたるかの腕に、
物もひ煩らふ額をよせて、
樂しき夢路をたどりなば、

紅絹袖

長鬣風ある放れ駒の、
牝馬の遠目に狂ふ如く、
軀の熱情一つによりて、
春の日ひねもす君を思ふ。
戀する心の常と知れど、
目に入る自然の物に比せば、

劣るよ若い子母に恥ぢて、
逢ふ期もをりく時を後る。
人目や煩らふ雲に似たる
やさしき乳房を頬にもよせて、
夢路の美酒くまんのみを、
美ましいかな色を若み、
玉なる肌はだに香かほれとてや、
腕うでにまかるゝ紅絹べにぬいの袖そでの。

螢

さゝらぐ小河の水際ぢかく、
螢ほたるか柳やなぎのかげに凭りて、
暗くらの夜身ひとり照りつ消ゆつ、
可憐あはれや苦思くしも知らず顔かほに、
静しずけき木の暗幕くらまひよりて、

思おもひなき身の夜更けぬるに、
か細こほき火影ひかげに照らし見るは、
下葉したばの車くるまを掬くまんとてか、
自然しぜんの住居すまはいとも清きよく、
自然しぜんの遊びあそびはいとも樂たのし、
自然しぜんの住居すまにひとり遊ぶ、
自然しぜんの眞子まこは幸さいある哉や、
今夜こんやは子刻こく吾われも寐いねで、
河邊かべの道遙みちのほ汝なに似にうか、

蟋蟀

蟋蟀せせり在堂
役車やくぐるま其休そのやすみ
今我不樂いまわれがたがた
日月其怡にちげつそのよろこび 唐風
自然しぜんの眺めながめの美うつくしい哉や、
未葉よもぎにみだるゝ露つゆに醉よめひて、

静けき夕のすさみとてや、
 この草がくれに虫は鳴けり、
 手纏の眞玉とさゆる音色、
 軒端にこぼるゝ榎の實みても、
 眉根を開いて笑みぬべきを、
 何をか煩らふ君が姿、
 鏡と見るまで澄める空に、
 輝をうつすも心なしや、
 若紫なる色にしみて、
 酌めども盡きざる酒もあるに、
 溢るゝ涙を袖にけして、
 來りて甘露の盃を含め、

夕

彼方^{あな}にけむれる森^{もり}のあたり、

乳房^{ちちのうへ}によりそふ稚兒^{ちひなご}の如く、
 静かに眠れる空の色も、
 浅紫にしみゆく此夕暮^{このゆふぐれ}、
 願ふは飽なる君と二人、
 野末の逍遙心足りて、
 情に燃ゆめる胸の中に、
 秘めたる小琴や弾いて見んか、
 さらすは千種の花をともし、
 さしそふ水枝にそよぎわたる、
 涼しき夕風髪にうけて、
 霞に眠れる野邊の如く、
 優なる姿に倒れ伏して、
 ねさめぬ夢にそ切に願へ、

眞珠

小島にかゝれる曉の月の、
 溶け入る光にかぞへ見ても、
 寢覺の海神龍の宮に、
 得難き寶や誇りけんよ、
 夕暮先づ射る一つ星の、
 か細き光に透かし見ても、
 沈みて果なき其命の、
 痛みや泣きけん蚕の子らは、
 わゝ幾千歳の春の濤に、
 額をひたして學びわたる、
 尊き教を胸に藏め、
 静かに爛めく姿みれば、
 美々しき才子の瑤璃に似たる、
 瞳子の光ぞ忍ばるゝ哉

桐葉

桐の葉飛びたり諸手組んで、
 澄みたる虚空を仰ぎ見れば、
 浮雲悠々答なきに、
 桐の葉抱いて岩に座せり、
 物皆屯所を無期におくか、
 今葉はこぼれて土にいれど、
 千載がはらす春を待ちて、
 善い哉生命を人に語る、
 千曳の巖は背にも負はん、
 神の戸射貫きし武者の如く、
 誰身か恐るゝ心なしに、
 落ち来る奪ひて木葉裂くか、
 神其を作れり誇る子らは、
 來りて其身の力試せ

尾が紅

一 若きは何ぞ耳染の色さへ冷ねて顔くは

吾興ざめて覺ゆるに、まづ盃をかたむけよ

二

木の實食ふも種とりて、土に埋めおく君なれば

ひくき調も耻とせず、顔さしあけて歌ふなり

三

そも女子を譬ふれば、鴨目くいる組紐か

姿ほそくも、吾戀のこき紅に燃ゆる哉

四

君深山路の木隠れに、朽つる精舎の壁を見て

枯れし命のおきどころ、悲しとおもふ事なかれ

五

われ墨染の袖をりて、燈火掲げし程こそは

火影にうつる本尊の鏽たふとくも覺泣けれ

六

春の夕ぐれ只ひとり、堂にたれたる曼陀羅に

瘠せし尊者の肩を見て、
おもひきもなき身を泣きぬ。

七

請ふ言よせて今更に、
緇素別なしと嘲けるな、
光り見初めし始には、
吾なは戒を知らざりき。

八

夏轉寢に、羅衣の
袂かけても秘めたるを、
瘠せし頸にまかんには、
あまりに惜しきかひな哉。

尤

燕戸に入る永き日を、
獨り寂しく入角の

太き柱に身をよせて、
説くに耻ある物思

十

深くな問ひぞ例ある
まれの夕座に若人の
髪美しくしき姿みて、
浮世ゆかしと戀ひそめき。

十一

誰行すりに香をかぎて、
荆棘がもとを探らざる、
誰田の畔に音をきいて、
葉かけの雛をのぞかざる。

十二

儘よ肌は業風の
鋭き爪に裂けぬとも、

優しからずや力ある
腕によりてさすらはい

十三

あゝ人知れず目なれてし
御寺の庫裏を逃れいで
野に咲く花に隠れたる
胸の思を誰か知る

十四

これ引接か幻の
薄き望に導かれ
快樂の小壺此日より
むすぶか儘と思ひてき

十五

暫し木蔭に帙篋ときし
實ある頃を忍びしも

乳房さはりて吾胸の
力ある血に氣は立ちぬ

十六

塵の巷に智者しらす
情ある子のなからずや
遅日日々らしさすらひて
落ちたる珠をさぐらまし

十七

身は羽かるき胡蝶にて
花の香とめて行き行けば
此處に彼處に歡樂の
夢盛りなる浮世かな

十八

黒染衣ぬぎすて
紫裾濃着更ふれば

みだれて高き祉の香に、
人なつかしき思あり。

十九

頸にかゝるあまそぎの
姿をかしと指さすな、

一襟手半振分の、

昔とも見よ情あらば。

二十

股の和毛に蜜ぬりて、

木ぐれにいそぐ蜂の子よ、

君が衣の香をかいは、

吾に告げこよ人しれず。

二十一

花の梢に乳をかけて、

霞をつゝむ幔幕は、

誰が歡樂のむしろかや、
揚羽の蝶の紋所。

二十二

許せ沙尼が身戀ありと、

暮引きかゝげ窺へば、

頸うちよせしめやかに、

春たのしむか諸人の。

二十三

盃かみて手をくみて、

日かげに背く若人の

顔さしのぞく女子の、

何を囁く忍び音に。

二十四

君唇に笑あれば、

胸に戀路の苦もなけん、

吾他の例見る度に、
むすぶの神に恨あり。

二十五

花影たゆる川隈の
岸の若草ふみゆけば、
情あるかなよき人の
春慕ひゆく屋形舟

二十六

琴の細緒に指おちて、
唱歌の聲のおこる時
龍頭鷓首水を蹴て、
樞にりやらめく波の玉

二十七

鳴く鳥が音に苦あけて、
しばし流人のみとれすや、

病める胸には餘情ある
律呂ぞ切に堪へがたき、

二十八

伽陀になれたる耳とちて、
柳のかけによけければ、
落つる涙はたぬれど、
胸のなやみを猶しきる。

二十九

頬にふりかゝる黒髪を、
とる透櫛にかきあけて、
衣紋つくるひ見かへれば、
髪のかゝりば香あり。

三十

見よ、瀬にはしる若鮎の
透影しるき水底に、

巳が姿をしづめては、
棹さし下る筏あり

三十一

筏筏士何見て下る、
波漕ぐ舟足早み、
まなかひ走る少女子の
袖のみどりや見て下る、

三十二

聲ふりあげて若者の
行方や知ると言とへば、
妾いかにとかへされて、
何と答へん聡かしや、

三十三

目か、黒髪のふりかゝる
額にきらめく美々しさり、

尾上を渡る明星の
暗きを聞く姿あり

三十四

鼻か、程よく肉づきて、
顔整ふる氣高さは、
森をふまへて日に向ふ
城の櫓の風情あり

三十五

聲か、真紅の唇に、
響きてさゆる清しさは、
花を砕いて羽叩く、
伽陵頻伽の音色あり、

三十六

袖か男のまなかひに、
地細の縞の浮かざらば、

寺の柱に喚ぐ如き、
空薫物の香をとめよ。

三十七

名か思はずや道遙に、
一本咲ける花を見て、
髪にかざして眺むるに、
名を問ふ隙も客れトとは

三十八

下る筏を呼びとめて、
岸の芝生を追ひゆけば、
裾はいばらにからまれて、
圓き踵は傷つきぬ。

三十九

あかき血汐の溢れては、
野に花塗るに、色鳥の

長き愁を引くみせて、
覚むる人を誘はいや。

四十

具多羅葉の末葉みて、
經思ひでん人ならば、
れつる血汐のあとをみて、
人哀ともしのばんか。

四十一

あゝわれたへず眩きて、
君がすがたに焦るゝを、
何くるしんで、僻者の
世にわづらふか、人の子よ。

四十二

會下うちむれて春の日を、
はてぬ論議に消す如く、

趣味なき事に若き身の
花にそむくはうからずや

四十三

水面銹びたる智恵の井に、

飲けし盃さしいれな、

ぬるき車くるまのしたゝらば、

花の眞ま袖そでの朽くちやせん

四十四

見みずや、若わか草くさ離り々々として、

霞吐あせく野のの末すえとほく、

野馬のまうちひれて永ながき日ひを、

あかぬ快け楽らくに酔よぬらし

四十五

堅かたき蹄ひづめをふみわけて、

雄おとこか香か風かぜにいさゝけば、

二ふたつの耳みみをふりたてゝ、
雌メか鬣はげを波なみ立てぬ

四十六

腹はら帯おびほどけて若わか草くさの

花はなに青あお毛けのさまよへば、

肌はだ背せに春はるをうちのせて、

路みちなき野の邊へに采いろは毛げ飛とぶ

四十七

あゝ姿すがたあり心こころある

野のべの陸ちからにくらべては、

唯ただ耻はかしき人ひとの世よや、

此こゝ處ところに榮さかなし、恩おん籍せきなし

四十八

裾すそうちはらひ過ぎゆけば、

里さとの細こ道みち花はなちりて、

胡蝶をどろく田の畔に、
妹背手をとりに歌うたふ

四十九

道行くところ部落あり、

部落ある地に屯あり、

屯のなかに若きあり、

五十

若きがなかに戀歌あり、

外不興なるこの世には、

若き胸よりあふれいで、

香を吐く息の響こそ、

柱なき緒に鳴る曲と知れ、

君が姿のこひしさに、

桃の蕾の紅とりて、

五十一

日かげうつろふ白壁に、
まづ塗りそむる髮際や

五十二

菘ふる指に鳴る豆の

細き響は傳ふれど、

それと幻に見る影の

畫にあらはれぬ悲しさや。

五十三

消して盡きて消す程に、

生命ある目のうつらねば

心のみこそいらだちて、

朱に染みたる手は倦めり。

五十四

壑道かよふ旅人の

側目もふらで路せくに、

ふりさけみれば紫の
雲のあなたに日は落ちぬ

五十五

田畔づたひに渡りゆく

宵の霞に閉されて

眠りおぼゆる其中に

君もと知れば懐かしや

五十六

技さしかさす古柏の

静かに暮るゝ此宵を

雨も注げと祈るかな

五十七

花の香を蹴て歸る如

羽露色ある燕の

髪うちぬれて吾夫子の
樹蔭頼まばいかならん

五十八

神此を許せ幸なくて

十歳浪路に浮きし子も

妻敵うちて寢室に入り

夜を睦語にふかさずや

五十九

若し今こゝに君を見て

若き思の物狂

吾煩ひを忘れ得ば

猶幸多き子ならんを

六十

逸品得たる市人の

富の限りを放らすや

君が腕によらんとき、
吾わが命を擲たん

六十一

賤の男がうつ連枷に、
丹穂はらふと散る如く、
夜の袖より糠星の

六十二

きらめき落つるをかしさや

小櫛とりさす腕揚に、
おつる葉露のきらめきて、

葉守の神のさゝやかか、
暗にか細き響あり

六十三

今薄くとも燭あらば、
下技がくれにさし入れて、

若葉にこむる春の香を、
心酔ふまで暎がましを、

六十四

竈火うちまもる竈の神、
冷白し厨にぬる頃を、

凝らす瞳子のきらゝかに、
吾ひとりのみ物狂

六十五

暗にかくれてほのかなる、
人の姿を透しみて、
諸手さしのべよりそへば、
顔に下技の露ちりぬ

六十六

踵にさはる花と葉の
色香も知らず探り來て、

高まつはる其かげに、
手心圓き石を得ぬ、

六十七

是撥とみて手すさびに、
木の振叩いて聲細く、
誦すとしもなき吾歌の
をさなき節を誰かきく、

六十八

摩尼珠得たらば衣ときて、
深くも包め、永き日の
手慰みにと置きし間を、
吾そのかげを失ひぬ、

六十九

世に若者の頸より、
榮ある珠の名はなきを、

浅き少女のたなごこに、
定まり兼ぬるうたてさよ、

七十

さみに教へん夕暮の
道危きに宿とらば、
米は黒くも美人の
白きを撰べ、旅人よ、

七十一

かの和肌に手をふれて、
底の泉をさぐりみば、
天濃漿か、枯木なる
男の知らぬ趣味を見ん、

七十二

燃ゆる思の苦しさに、
智覚なき木をかき抱き、

普し吾世を泣く程に、
冷れたる幹を暖めぬ。

七十三

姿優なる春の夜の、
響もたてい更けゆけば、
鼻にぬしなき香をかぎて、
人なつかしき思する。

七十四

うるむ眼のちからなく、
空の容子を窺へば、
光りまたよく糠星の
眠をさそふ優しさや

七十五

めぐる遊星小車の
響もたてな思寝の

夢やさめんとかこつまに、
夜や明けぬらし鳥をなく。

七十六

下枝をもれてさし照す、
明き光にれどるきて、
けむる臉をみひらけば、
こは天變か世のさまの。

七十七

誰に比すべき玉手箱
紐とく程の宵の間に、
浅ましいかな袖さけて
紫袂濃色さめぬ。

七十八

草かきわけて葉がくれの
水の溜りにうかいへば、

若き命の星と聞く、
瞳子の色ぞうるみたる。

七十九

松浦佐用姫顔巾ふりて、

石と化せしは趣味あれど、

唯思寝の夢の間を、

かゝる様とは疎ましや。

八十

身は木乃伊にて行めば、

野守の鏡ひいらきて、

底に罔象の聲細く、

人の歎きを笑ふゆり。

八十一

君漢才に富みたれば、

吾に教へよ、鬢ぐきの

三十路をこねてあせにきと、
うらぶれ泣きし人の子を、

八十二

吾劣らめや、黒髪くろかみの

櫛くしにもたへではるくと、

こぼるゝ見れば、こは如何いかに、

緑きよの色いろのあせにたる。

八十三

風流ふうりゅうれゆく年鷹としたかの

凝これる眼め子こと云いはさるに、

唯ただ一目ひとめ見みよ、春はるの日の

景色けしきは早く移うつるひぬ。

八十四

野のにさまよひし佐保姫さほひめが、

紅裳べにぎほの裾すその糸いとはつれ、

花は聲なく地にねちて、
枝にさゝやく青葉あり。

八十五

春を包みて和らげし、

霞の幕引きよけて、

いかめしいかな夏の日の

空は晴れたり高らかに。

八十六

夏の日さかり旅ゆけは、

泉のほとり野の木かけ、

憩へる人の多かるに、

人もとめよる便りあり。

八十七

君は流れの見渡しに、

一本咲ける百合の花。

吾は河原の砂に飛ぶ、
翼かよはき野の胡蝶。

八十八

儘上水面にくるめくも、

吾れ金色の羽ふりて、

紅の香高き唇を、

君にふれでは止むべしや、

八十九

かの糸倉を引きしめて、

撥によき音を聞く如く、

思ひせまりて吾胸に、

戀の力を溢れ亂るゝ、

九十

葦間かきわけ妻をへは、

末葉の鬚に髪そゞけ、

くゞり行く水うちよせて、
紫裾濃裾ぬれぬ。

九十一

小櫛は落ちて見ぬわかず、
道ゆきかへり尋ぬるに、
痛み覺はて手を見れば、
指環は朱の血に染めり。

九十二

きみ指さして高聲に、
降魔の相とな嘲けりぞ、
われこの底に熱情の
手ならで觸れぬ物藏す。

九十三

青葉風ある木がくれに、
行く佐保姫が身ならねど、

人目を詫びて唯ひとり、
急ぐ心を誰か知る。

九十四

行手に高き岡越の
杉の木立にはのみいで、
落つる光りを彩れる、
嚴物造こは寺か。

九十五

それと見るより住みなれし、
庫裏の古壁目に見えて、
墜落せし身の罪なれや、
むかしゆかしく歩は遅く。

九十六

伽藍の軒に鳩飛びて、
影しづかなる境内や、

無聲をやぶる咳きに、
碎けておつる木蓮花

九十七

鐘樓にのぼる出家一人

歩みものうき日盛を、

後姿さむく石階の

下にぬかづく物思

九十八

顔ふりあげて來し方の

幾山川をながむれば、

おのづからなる其様や、

此處に雲行き雲かへる

九十九

去來迢々若き身の

長き恨に堪へやらず、

顔く膝を折りしきて、
落つる涙をぬぐふかな

百

森を隔てゝ里の子の、

鼈叩いて諸聲に、

歌ふは何か情ありて

世にも哀れの一ふしや

百一

「れ染十七逢合傘に、

人目恥ぢしは昨日かや、

今は法衣の袖儿帳

目もと可愛き尼額」

百二

われ朽尼の身に堪へで、

趣味ある方に迷ひしが、

快樂花さく下かけり、
袖ぬれがちの世なりけり、

百三

今物詣に名をかりて、
供物具すべく思へども、
塵の縁をにぎりたる、
五ッの指に恐れあり、

百四

消ゆる期もなき胸の火は、
寺に匂うなき物なるに、
せめて縁ある若者の
手に攬たん名を許せ、

百五

撞く鐘の音に驚きて、
袂のちりは拂へども、

名残はつきす遅々として、
ひとり行方に迷ふかな。

遊子

It is not love, it is not hate,
Nor low ambitions' honors lost,
That bids me leave my present state,
And fly from all I prized the most?"

— Byron

ひと日松蔭に坐して、思に沈めるど
き奏曲高く過きゆく樂隊ありかへ
りみれの眞先にたちて銀笛を吹け
るもの幼時嬉笑を共にせり一友な
るにこそ何となく涙なかれて胸のな
やみ癒へがたければよめる

風の荒みに耳たて入、
よべ手枕の夢やふれ、
笛の調べに君を見て、
けさ紅色の涙ふく。

雲と浮びて雨となり、
浪とながれし身なればか、
ぬれがちにする常なるに、
怪しむなかれ旅人よ

旅に寝旅に年ふるは、
吾身ばかりと思ひしを、
今日東路のよそにして、
ゆかしや友を見にけりな

君は肥江たり、笛ふいて
天の眞名井やむすぶらん、
吾は瘡せたり、歌屑に
からくれなるの血を染めて

濕み勝なるまみ耳か、
髪のみどりもあせにたる
吾姿にもくらぶれば、
うべ若い哉君か身は

いづれ長きと誇りたる、
振分髪のこぼれてし、
それかあらぬか初花の
色しのばるゝ君が額

誰か眞心の紀念ぞや、
紅さし指の玉の環は、
懐かしい哉笛を囁む
なが唇のくれなるの

露も色ある松か枝に、
吹き残したる音をきけば、
新株をわたる鶉鶴の
戀の歌にも似たる哉

細き瞳をひらめかし、
笛吹きて行く若人よ、
ゆめ苦き世の智慧の井に、
汝が舌をな試みぞ

晝は野山を吹きとよめ、
暮は木暗に少女子の
腕をとらん折にこそ、
天の快樂はありと知れ

律に馴れたる耳なれば、
聴くな話さし世語は、
告げて耻ある來し方の
花も實もなき我身なり

綻る腕もわなまきて、
松が枝ごしに眺むれば、
顔に亂るゝ紅涙の
落ちて砂となりけり

巖頭にたちて

思に堪へて磯の邊の
巖が上にたゞすめば、
沈める海の底ふかく、
かくれて湧くや春の濤

干潟にくぼむ蜆か子の
足占のあとにたゞへたる
なごりに映る影みれば
やつれにけりな吾頰の

耳をすませば岩がくれ
薄き命の響きして
風におなく蘆の葉の
波間に沈む一ふしよ

色めきそむる葦がひの
波に折らるゝ音をきけば
浮世の海に漂よへる
若き命のはかなしや

春の潮に洗はれて
沈む眞珠の色みれば
浅ましい哉苦き世の
涙に酔へる己が身や

目をめぐらせば海神の
沈める面に恐れあり
手を拱ねけば吾胸の
底に知られぬ歎きあり

髪吹きみだる草の葉の
風のぬるみに顛きて
凍りはてたる額には
熱き血汐もかれてけり

ふるふ睫毛に溢れては、
岩に砕くる紅涙の
落ちて潮に聲あるは、
底の珠とや沈むらん。

春夜

人無更少時須惜
年不常春酒莫空 小野篁

春の光りの薄くして、
若き快樂の短かさに、
花咲く影に酔ひしれて、
酒壺叩いて歌ふ哉
花の香碎く風をあらみ、
細き眉毛を懸ませて、

燈火にかざす少女子の
袖の心を知るや君

花を踏みては和らかき、
踵にしめる紅色の
名残の色をかへりみて、
暮れゆく春を惜む哉

脆き此世に又いつか、
春を抱いて樂まん、
せめて今宵は歡樂に、
智恵の腫なめぐらせぞ

盃を含みて目を閉ぢて、
只さびしらの物思ひ、

旅 寝の夢の
 苦き涙の
 誰かは知らん
 ふちを呑みて
 酒は飲むとも
 覺束なげの子が
 一ふしを

君よ涙のせかれずば
 火影にそむけ人知れず
 關山曲
 君行く方に
 草鞋もとめなるも
 脚絆の紐の
 宿かるべきに
 似たりけれ
 歌ふを聞けよ

君きみ紫むらさきの

やさし
旅たびの身みの
か
から
す
や

人ひとの情なさけの

細こまさ
火ひ影かげに
か
へ
し
見みよ

袖そでの綻ほころび

悲かなし
味あじを
知しる
と
云いへ

醉よめ醒さめの

肌はだう
ら
寒さむさ

髪かみの
は
嗅かぎ
て
こ
そ

枕まくらに
残のこる
筋すぢの

古ふるき
憂うれを
捨すて
よ
か
し

厚あつき
情なさけの
陸りく語ごに

少せう女にょを
抱かかり
影かげに
寂さびしく
ば

旅も情の
 細さ山路の
 夕迷ひ
 憂さ
 寂し
 君は急ぐ
 何處まで
 眠れと
 あるを
 惑はで
 旅人よ
 長かるに

明日は行手の
 すがり
 泣きもせば
 嬉しからずや
 かゝる折り
 暗路に
 目の光り
 妻覓狂か
 燭とりて
 夜半の床
 紐しめて

宿らせ玉へ、
旅人よ、
なからずや、

草に眠れる旅客に與ふ

覺めな旅人

越ゆるに熟き日は

山路かな

行方も問はず、
名も問はず、

只安らかに
いねたまへ、

葉影の花も
忍ばれて、
憂さもなげなる
彼の寝顔

紅もやしめる、

亂れてかへる
蝶の羽

羽な障りぞ、

心して飛べ、
鼻面に、
やよ胡蝶

悲しむなかれ少女子よ、
 只さびしらの物思ひ、
 垂こめてのみ暮しつゝ、
 色めきそむる春の日を、
 壁にそめたる
 越ゆるに熟きかな、
 覺めな旅人、
 日さかりは、
 君と眠らん妻も、
 花妻も、
 むしる腕に、
 砕けても、

かの眞玉手に、
 何れやさしの
 草枕の
 天つ少女の
 額にまとふ
 花かづら
 谷間の百合の
 露くみて、
 染めて見ましの
 花笑や、

桃のうま酒くみあきて、
覺束なげの木傳ひに、
羽うちはふる雛鳥が、
酔のすさみの音を聞けよ、

振りこぼれたる前髪の
にはふ額に手をふれて、
玉の指環にあたゝかき
血汐の湧くを覺ゆキヤ
水に散り浮く色みれば、
花のいのちの果なしや、
老ての後のわづらひを、
若きに泣くな少女子よ、

襟にみせたる紅衣に、
涙なかけぞ春の日の、
薄き光りに照しては、
幾日を待ちて乾くべき、

戀に燃わたる眼睛こそ、
若きが程の花と云へ、
咲き散る木々の色をみて
なに思はずや君か身は、

眉に閉ぢたる悲しみを、
罍にくみて來たり見よ、
桃のつばみの紅とりて、
壁に染めたる一ふしを、

ひさふり

磯の草がひ潮にぬるゝ
われは君ゆる袖ぬるゝ

庭の鳩の兒小雨に瘠せぬ
われは君ゆる顔やせぬ

妹が襟は背にむすぶ
われは君ゆる胸結ぶ

賤が朝菜は夕につまる
われは君ゆる身をつまる

ふさうた

舟子よ漕げく、夕日の落つる
岡に色あり光あり

舟子よ漕げく、鴨浮く波に、
刷毛一筆の黒繪あり

舟子よ漕げく、濱風かよふ
松に隠れて琴かよる

舟子よ漕げく、露おきむすぶ
岡に色よき木の實あり

舟子よ漕げく、領巾振り待てる
妹にやさしき情あり

舟子よ漕げく、少女のすめる
浦に榮あり、決樂あり。

蚤少女

君は浮べる沖の石

朝潮に、

ひたりて一層見ばはする。

君は媚ゆる磯の芦

朝風に、

吹かれてかすかに歌うたふ。

君はすすさきの一つ星

夕潮に、

寂しき姿を浮べつゝ、

君は芦間の蚤小舟

夕風に、

ゆらめく胸板ぬらしつゝ。

粉屋の女房

野こね山こね谷こねて、

京へと問へば猶三里、

粉屋の女房笑顔よく、

眉毛うちふり道を説く。

娘可笑しや

底の鏝を洗ふとて、

河の浅瀬に水斐砕き、

娘可笑しや顔赤らめぬ。

急ぐ旅人道とへば
吃る口元袂にかくし、
娘可笑しや、顔赤らめぬ。

心化粧の束の間を、
さとき弟に指し笑はれて、
娘可笑しや、顔赤らめぬ。

蕪煮るとして鍋かけし
竈のぞけば薪は消えて、
娘可笑しや、顔赤らめぬ。

ね松釜たけ、菜をつめと、
女房ぶりをば母にも聞かれ
娘可笑しや、顔赤らめぬ。

燕の賦

軒の古巢をたちはなれ、
昔戸の柳の木傳ひに、
春東なげの音にたてゑ、
羽試むる燕。
一つ蹴るゝ野の花に、
春の香高くしみ渡り、
水枝を染むる日の影の
花やかにさす朝ぼらけ、
翼しめりて立ちいづる
汝世はげにも幸ありな。
その紫の浅くとも、
やがて木の葉に身をのせて、
八重の潮路を越ぬべき

羽とし見れば力あり
歌ふ音色の若くとも
やがて霞める青柳に
かの新月を呼びいづる
それと思へば調べあり
小波ぬるむこもり沼の
水際の泥を啄ばみて
はにふが軒を柱礎に
興せる壁を塗る見れば
汝は才ある工匠哉
東風かるき城の春
花の彩雲穿ち来て
獨り興ある物狂
右にかけりて色を蹴り
左に飛びて香を碎き

こぼるゝ露に驚きて
花より花に迷ひ入り
風も仇めく夕暮の
鐘にうたれて飛びくれば
上羽にしめる移り香や
酔うて眠れる佐保姫が
鬢の油やこれならん
烟に似たる春雨の
一村こめてふりしかば
花の枝より湧き出る
桃の美酒酌みあきて
新發意が讀經聲細く
花散る寺の層塔に
光まばゆき夕なぎの
西の方をば夢みつゝ

噫あゝ鳥と名は呼べど、
人にしられぬ一すぢを
胸にひめすや、燕
青葉がくれに仄見ゆる
柘榴の花のくれなゐに、
片笑みて鳴く雀子の
その木傳ひも何かせむ、
情は深き女子の
乳房を含む稚兒に似て、
さはれば靡く青柳の
糸にすがれるふりを見よ
東雲早く巢をたちて、
雲の旗手を靡けつゝ、
朝羽を振ふ蘆鶴の
羽衣の曲も何かせん、

風に吹かるゝ柴の葉の
尾上越ゆるも忍ばれて、
雲紅の夕ばねに、
飄り行く姿哉
圓き頸は葉隠れに、
かゝる葡萄を見る如く。
胸の和毛の白妙は、
女子の耻る肌に似て。
睡子の色のらうたさは、
潮にすめる一ツ星
上毛の艶の紫は、
朱冠に彫れる雲母哉
鳥よ羽振につかれなば、
觸れてやさしき夕影に
麻波なびく下がくれ、

若紫の酒くみて、
天の快樂を味へよ、
弾くや大絃小絃の
風に亂れて鳴る如き、
酔ひのすさみの歌きかば、
誰かは憂を忘れ井の
水鏡に似たる身をすてよ、
ふりさけ見れば紫の
雲の行方を暮はざる、
あゝうら若き吾友よ、
ゆめ鳴泉のさかしらに、
光な避けぞ葉がくれに、
こもり沼に立つ青鷺の
かひなき事を煩らふな、
朝日に舞へば光あり、

夕日に鳴けば韻あり、
風に色あり野に香あり、
森に歌ある夏の日の
あかね快樂を求めずや、
酒にそみたるかんばせは、
寶ならすや若き身の
歌にうるめる目の色は、
春ならすや若き身の
飛べや梢の燕、
行方は夫と知らねども、
嫉しと思ふ汝が旅の
袖ひきとめん吾身かは、

百合花

巖のかげの小百合花

一夜のうちに蝶をうみ、
嬌び姿の可愛うて、
ひねもす胸にいだきしが、

夏の光のみせたさに、
放いて見うと手をとけば、
かはす諸羽のひらくと、
蝶は再びかへり来ず。

あら憂や惜しき事してと、
夜たい巖にもたれふし、
身のあやまちを悔ひ泣けど、
蝶は再びかへり来ず。
夜あけて見れば小狐の

足に無残や萎れたる
小百合、白百合あゝここに、
狂ひてかよふ蝶一つ。

秋の歌

秋は樂しや、苦ふかき
賤が軒端にかゝりたる
柿の實染めて、味そへて、
廣き枯葉の袖ぐゝみ、
高架はしる葉がくれに、
ふくらむ葡萄房ふとく、
若紫の酒さして、
胸あたゝかき少女子の
朱の唇待顔に、
葉分の風にゆるぐなり。

吾から振れて鳴る豆の
莢にさねたる音を聞きて
枯葉がくれに見入るれば
こはなつかしや蟋蟀の
獨り興ある物すさび
行いて田面を眺むれば
黄ばみて垂る、八束穂の
鬢梳らせて稻機に
田子を待つ間を秋姫の
風引きとめて靡きよる
廣き額をかきなで、
秋の容子を窺へば
霧の香高さ東雲を

爪紅の少女子が
鬼灯ふくむ花の野や
此處に優ある姿あり
こぼれて赤きさ、栗の
數よみ誇る童子が
歌うて歸る柴山や
其處に静けき快樂あり
燈火めぐりて杳なめて
をとめ籠ふる星祭
ゑらぐ老爺の唇に
泡さく酒の色を見て
誰かは眉を開かざる
散り透く森の下がくれ
曉露に髪ぬれて

窺うかがひよる獵う人の
含こむ小こ笛ふえの音ねを聞ききて、
われ昨きのうの夜よの夢ゆめ忘わする。

夕ゆふ空そら高たかく峯ねにかへる
豊とよ旗はた雲ぐもを仰あやぎ見みて。
木きの實みもり食くむ山やま雀すずめの、
律りつ呂りよある音ねを忍しのび聞きき、
實みのりて見みゆる畠はたけ生なに、
重おもき利き鎌かまの跡あとふみて、
露つゆのみあける鈴すず蟲むしの
節ふし珍めづらしき歌うたきけは、
秋あきは樂たのしや、吾われ胸むねに
自し然ぜんの興きようのをどるかな。

木曾川

鮎あひ子こさばしる木き曾そ川がはの
沙すな路ぢにひとりさすらひく
白しろ貝がら拾ひろふ少せう女によ子が
袖そでのみどりを見みずや君きみ

頑たつ々たつ乎たなる人ひとの世よの
色いろなき香かなき野のを遠とほみ、
春はるの日ひ永ながのものすさび、
こは情なさけありをとめ子こよ、
赤あか裳さかの裾すそのうらわかみ、
道みちも榮はなある行ゆきさ來きさ、
ひそかに渡わたる河か風かぜに、

亂れて響く一ふしや。

歌ふを聞けば春の日を、

小貝拾ひて集めみて、

いづれ夫はとる君はとる、

子安の貝を吾はとる。

それは誠か若き身の

袖のかほりにめぐりゆく

潮の花の此春を、

君が胸にも咲きけりな、

あゝ湧きかへる吾額を、

眞砂におちて窪みたる

かの足跡に埋もらせて、

深きなさを探らばや、

琵琶湖畔にたちて

走る油脂よみがくれに

網代の網はくいととも、

ゆめ洩らさしな悲しみの

細き釣緒にさはりては、

透影しるき鱗を、

柳のかけにのぞき見て、

毒ある海にあはかなる

身の薄命をたもふかな、

木葉に似たる身を寄せて、

藻屑がくれにひるがへる

若きすさみも春の日の
暮れぬる程のひまと知れ

水際に白き小波を

薄き鯉にくだきては

心ありげの物すさみ

何をかくる、吾友よ

星の光りに影みにて

浦づたひ行く艇が子の

足音に響く真砂路に

小さき鱸をさしつけよ

氷雨に折れし葦の葉の

春に遇ひたる心地して

汝もつめたき砂摺に
あつき血汐や覺ゆらん

げに人の世は荒金の

さびをし溶かす釜なりや

真金のつやを見まくせば

底の熱をあた、めよ

そこに沈める真珠あり

こゝに香れる野花あり

ゆくな油脂上、宵暗を

なに恥かしき契かは

加古河をすぎて

横雲峯にたなびきて

光まばゆきこの夕
 波しづかなる加古河の
 濤に小網ひく蟹が子よ
 浅瀬の波にはしりよる
 鮎子な追ひぞ、苦き世の
 味なき酒の盃を、
 吾水上に注ぎしに、
 水面に落ちて光ある
 廣き額の色みれば、
 鋭き爪の凶神は、
 見ざりけらしな蟹が子よ、
 君妻ありや、すさびゆく

風に毒ある人の世に
 胸やはらけき女子こそ、
 頼みの宿と知りたまへ。
 君稚兒ありや、懐かしの
 乳房をふくむ唇に、
 いろも錆びたる智慧の井の
 にかき車なす、らせぞ。
 小網にかゝれる白鮑の
 われもかひなく驚きて、
 唯恐れある物狂、
 こゝに道なし、快樂なし。
 行方も問ふな、名も問ふな、

弛ゆる弦の音にも似て、
風にわななく一ふしの
弱きしらべを聞けな、唯

梅保川にて

水色しろき梅保川の、
みぎはを染むる青草に、
牛飼ひなる、里の子を、
誰し哀れと見玉ふか

堤七里に行きくれて、
脚絆解く間の夕闇を、
城のやぐらに花散りて、
老いにけるかな、この春も、

風吹雪をよみ入る梅

牛追ひかへる野の路に、
踏むは紫つば草
踵すりよせ佇みて、
なげく心を知るや君

人に別れて野にくたり、
牛追ふ子らの名に入れど、
春ゆく毎に袖裂いて
昔の夢を思ふかな

星はいでたり、夜頃来て、
慰めを見る其かけに、
今宵は堪へず膝をりて、
袂に顔をさしあてぬ

あ、和らかき眞砂地に、
踏のあとをさはりみて、
智覺なき身に人知れず、
熟き涙をそ、ぐかな。

たのしみもなき人の世の
寂しき境に泣かんより、
われは情ある動物の
野邊の睦びを望むなり、

水色しろき楫保川の、
みぎはを染むる青草に、
牛追かへる里の子を、
誰し哀れと見玉ふか。

華燭賦

止むなくば夫れ夏の日の
若葉がくれに吹きわたちて、
小石をあらふ細流の
小波まくらにぬる風を、
そよと許りに注がせて、
燈火の花の香を高め、
林神も眠る短夜を、
獨り木暗に分け入りて、
自然の致ある物狂ひ、
心なぐさに遊ばまし、
あ、紙魚くゝる破反古の
鏝びたる海の底ふかく、

探る秀才のまみに似て、
細くきらめく色見れば、
心の鏡すみわたり、
うちに快樂の影たへ、
唯人の世のたのもしく、
木の暗闇に若草の
香るが如く、新なる
生命の味をさとする哉
巖影ふかく咲き残る
花の勢を照し見て、
高き香を鼻に嗅ぎ、
破れたる袖をかざしても、
なよび姿にはるまば、
燈火上燃ゆる汝胸の

げに魂合へる友なるに、
よしや火影は薄るとも、
木の芽たきこめよき人の
袖の移香しのばせよ

これ手にとりて少女子の
清き寝顔を守るべく、
これ身にそへて歌反古の
影ある珠を拾ふべく、
脈にさはりて吾命の
さかりの春を知る如く、
暗路にむかひ天地の
道ある方を透かしみて、
頼もしいかな白毫の
幸ある影を認むべし、

暮笛集 畢

金尾文淵堂藏宗教書類

綱島果川著 第三版刊成

病間録

新装クロス綴箱入頗美本

全一册金壹圓
小包料拾錢

本書は多年内藤の病に臥したる著者内生活の實録也最も熱烈なる煩悶を経て最も光輝ある感應を得たる心靈の活史也時代の要求に應じて而かも時代を超越せる神祕久遠の海潮音を傳ふる一種の近代的默示録也此書一たび出て、我文壇及思想界の波瀾高く揚り大方の批評集まりて彪然一卷を成せり今や三版刻成る江湖の諸君子幸ひに購讀の榮を賜へ

中村春雨著 小林千古畫

通俗新約物語

箱入全一册
定價金壹圓
小包料拾錢

三色版六葉及泰西名畫二十四葉挿入釘裝極美著者の緒言に曰く「聖書は世界の一大奇蹟である、又一大寶庫である、眼一度此を見る者は、普く方寸の天地に、日月も星も、山も河も大宇宙の森羅萬象悉く塵み込まれてあるに驚き、足一度其中に入る者は、前にも後にも金碧燦爛、右にも左にも光明赫奕、目くるめき心悼くの感に打たれる、あらう、されば、この一大奇蹟の謎を解き、一大寶庫の錠を開くはなかく容易な事ではない、否、一つの謎が解ければ、更に一つの謎が掛り、一つの錠を開けば更に又一つの扉が開き、一つの扉を開けば更に又一つの奥義を味へば味ふ程、その味は愈深く、且つ遠く無つてゐる奥義を味へば味ふ程、一遍二遍、通讀した位では、盡蕪である、老幼婦女子は唯、一遍二遍、通讀した位では、その大略の筋さへ會得が出来ぬ。そこで、本書は、専ら通俗を旨とし、先づ新約全書中の大眼目たる四福音書及使徒行傳、約翰默示録等を、四角な楷書から、圓い平假名に書きくづして、誰にでも読み易くし、散らばつた珊瑚珠を一つの糸に貫いて大體の趣を攫み得らるゝやうに編み上げた心算である。」と以て本書の内容を察し得べし

類書教宗版藏堂淵文尾金

中村春雨著

通俗舊約物語

近刊

名畫彩色書挿入箱入釘裝極美

著者先に新約物語を世に出すや好評噴々、恰も時代の要求に應じて與へられたる靈餌として大なる歡迎を受けたり而して今又切にして新たなる要求を充さんが爲めに舊約物語に筆を採り既に稿を脱して近く市に出てんとす、抑も舊約全書は必ずしも基督教の専有物に非ずカールライルが世界最大の文學と稱へたる劇詩「約百記」も、ダビデが高調深玄の「詩篇」も又「雅歌」の戀愛文學も皆此中にあり、其他創世記の初より「馬刺基」の終に至るまで全卷三十九篇悉く神話奇蹟及最も趣味ある物語に富む著者が清純雄麗の筆は必ずや之を通俗に書き崩して而も聖書の骨子と詩趣を失はざるべく新約物語と相並んで大方の歡迎を受くべきは期して疑はざる所也

中村春雨解説 松井昇畫

基督教物語

一册金拾錢 郵税金貳錢

基督の一代を畫解したるもの全紙十六頁極彩色石版摺にして高尚優美、之を小兒に與ふれば自ら敬虔の念を起さしめ不知不識の裡に宗教的觀念を養ひ得べし

類書雜版藏堂淵文尾金

五十嵐力譯補

兒童の研究

新裝クハス綴美本 定價金壹圓 小包料拾錢

人の性格を固定するは兒童教育の眼目なり後來の教育の根本實に兒童教育にあり兒童の心理の發達に應じて相當の教育を與へて正道に導くは親たるもの、務也這著は米國哲學博士テーロル氏の著を譯し且著者が多年研究の結果を加へたるもの原著が彼の國の學界に非常に推重されし如く此書が我國の教育界に貢獻する所多大ならん子を持てる親子を預れる教師苟も人性の芽生に美はしき技振をなさしめんとする人は此書を讀み給ふべし

正岡子規遺筆 木版美濃紙二度摺

俳人芭蕉

定價金七十五錢 郵税不要

河東碧梧桐書翰子規手形及題詠額面用 畫箋紙摺込

芭蕉翁は正風俳諧の始祖にして子規子は革進せる俳諧の祖なり此の明晰なる頭腦を以て彼の表裏を把握し高尚なる趣味によりて俳諧の眞髓を説く此書は子規子生前に書殘したる原稿を其まゝに木版としたるものにて内容と相俟ちて此偉人の雲湧き龍躍る筆端の美を味ふを得べし

類書說小版藏堂淵文尾金

中村春雨著 齋藤松洲
中澤弘光畫

密航婦

クロス綴美本
定價金七拾錢
郵税八錢

荒涼寂寥人煙稀なる西比利亞の曠土に賣られて胸に秘めたる聖き戀の花咲き出てん春にも過はず悶々として身の運命を打佐ふる密航婦が悲惨の境遇に萬斛の同情を凝きたるものは即ち是也かれ等とて餓鬼道に陥りたる奇生にもあらねば又地獄の鬼にもあらぬ人には賤しめられ蔑まれて嘲ひせられぬ彼等が内部悲痛の聲は如何ならむ涙あるの人よ之を讀め

中村春雨著

犯さね罪

近刊
定價未定

中村春雨著

雛鳩

近第三刊版

中村春雨著

無花果

クロス綴美本
定價金七十錢
郵税八錢

無花果は在來の陳腐なる舊套を脱して材を宗教に執り、信仰と人情の衝突、家庭と社會の撞着より生ずるあらゆる悲劇が其厚珠の如き女主人公の温情と及び希望と其心の復活とによりて遂に愛と信仰に満ちて和氣霽々たる樂天地となり行く光明小説にして百讀愛讀措く能はざるもの、讀む者又此樂天地の一人となるべく家庭に於て最良の讀みもの也

類書說小版藏堂淵文尾金

菊池幽芳著 齋藤松洲
鏑木清方畫

妙な男

クロス綴美本
定價各金六十錢
郵税各八錢

全二冊 前編(三版)後編(新刊)
妙な男は一篇の戯曲的構想より成り、多少の喜劇趣味を帯べる頗る奇詭の小説也、思ふに單調なる近時の文壇に一異彩を放つものは必らずやこの小説ならん、著者の筆や輕快にして清純、脚色變化縱横にして興味溢るゝが如く、始より終まで讀者を魅し去りて手に巻を措く事能はざらむるの妙味あり、

菊池幽芳著

七日間

三版
定價未定

菊池幽芳著

秘中の秘

全二冊
定價未定

大倉桃郎著 鏑木清方畫
平福百穂畫

琵琶歌

クロス綴美本
定價金七十五錢
郵税八錢

激越なる琵琶歌は綿々として全篇の骨子となり、負けし根性の爆裂弾といはれし男は、花の如き貴女の美はしき心と如何に相對して描出せられしかな見よ、初め此作の獲らるゝや文壇轟然として其作者を求む豈圓らんや征露の軍中に其人を見んとは、想ふに劍戟の事に忙はしくして、而も胸中悠々たる閑日月ある作者の妙想は内地に留りて其精華を開きたるならん

類書說小版藏堂淵文尾金

柳川春葉著

縁の糸

クロス綴美本
定價金七拾錢
郵税金八錢

神が結びつけたる初戀の縁の糸も思はぬ横風に吹靡けられ
あらぬ方に端を求めて纏れつきてより、汚れし色に染糸の
身となり捨て、月明かなる江の上の笛の音を、戀の歌口
にひやかして情うこかせ、うつしの戀に狂ひし身の末
の染色を、大川端の水に晒して、清き昔の夢を見果てぬる
薄命に泣く佳人のうらみつらみは誠に風流才子の斷腸の種
也

須藤南翠著

間一髪

クロス綴美本
定價金七十錢
郵税金八錢

巖谷小波著

喜劇七草

近
定價金七十錢
郵税金八錢

佐野天聲著

露の曲

新
定價金六十錢
郵税金八錢

情熱は金銀をも焚き情泉は岩をも劈き石をも裂く、露の曲
一篇はこの情熱の力を描く、土を掘つては地獄の底までも
行くといふ井戸掘の名物男鬨の重載が胎なる身の上にも
人生天賦の愛情は天使の如く可憐なる童女に注がれ千辛萬
苦に掘り得たる十餘丈の井中よりさつと噴出る泉と湧いて、
めぐみの露に聞くべき心の花、濁る世にひびくれ、茲に火
となる熱情は鐵錘一撃の血を見る運命となる、著者が情熱
に富める筆力はわが小説界を動かすものあらん

類書說小版藏堂淵文尾金

木下尙江著

第十二版刊成

火の柱

全
定價金卅五錢
郵税金六錢

著者は信仰の人、主義の人、其抑へ難き熱烈の筆を驅つて
現代社會の不健全なる思想、病的信仰、及罪惡に充ちたる
政治、實業の社會を罵つて自ら抱ける社會主義の爲めに獅子
吼の氣焔を吐けるもの之を「火の柱」とす主人公「篠田
長三」に於ては著者の抱負主義を見るべく、之に花の如き
少女「梅子」を配しては神聖なる戀愛觀を説き以て混濁の社
會に一大天火を投ずるものは即ち此一書也、昔時埃及を連れ
たるイスラエル人が、晝は雲の柱夜は火の柱に導かれて理
想の樂境に到達したるが如く著者は茲に社會主義の福音を
説いて自ら火の柱を以て任じて社會を導かんとして、あ
はれ既に一個の小説に非ずして豫言の書生命の書に非ずや、
本書市に出て、忽ち十數版を重ね亦以て社會思潮の傾向を
察し得べし。

木下尙江著

全部重版成る

良人の自白

全
定價各卅五錢
郵税金各六錢

上卷(十一版)中卷(九版)下卷(八版)
現代青年が社會の壓迫に煩悶せる聲は實に白井俊三に
りて縮圖せられたり學識高く情熱餘ありて然も力足らずに
際からず頭は天上の光明を認めて仰き年ら足は地上に接し
て見らざる飛翔せんとすれば反て暗黒に歩を進む明かなる自
覺は社會の重き壓迫と自己の深き罪惡とに堪へず遠き光明
に憧れて將に新曙光を得んとして國を去るに終る熱火烈々
たる情熱は社會の冷態なる束縛と相激して不平煩悶の結
果墮落に陥れるも女性の純潔なる愛の光明は復活の力を與
へたり本書は實に日本の(復活)といふべし

木下尙江著

新曙光

近
良人の自白續編

類書歌詩版藏堂淵文尾金

薄田泣菫作 満谷國四郎書

白 羊 宮

クロス綴類美本
全一冊金壹圓
小包料拾錢

『白羊宮』には泣菫氏が最近の詩作、六十有篇を収めてゐる、其多くは氏が従來の所作と、着想、取材兩つながら異つてゐる、また清新の趣味の揃めども、盡し難いものがある、氏は嘗て『わが詩はわが修養なり』と言つた人、『白羊宮』は即ち自然と人生とに就て見た儘である。氏が見た人生は、傍の實の様に虚つたものであつたか、戀愛は石像の様に美しい、冷羊宮』は美しい調で之を歌つて聞かせてくれる。詩人の故郷たる満谷鹿子木南齋伯の挿畫は精巧なる三色版で、一方ならず詩趣を添へてゐる。

薄 田 泣 菫 集

三 定價金六十錢
郵 稅 八錢

泣 菫 行 春

五 定價未定
版 近刊

薄田泣菫作 満谷國四郎書

白 玉 姫

書 絹綴合美本
價 定價金八十錢
郵 稅 八錢

『白玉姫』は泣菫氏の詩文集なり、詩は詞を民謡の情緒に採りて今の所謂言文一致の新體を詩歌の域に試みしもの、氏が従來の詩體と全く趣を異にして而も清新の詩味溢る、如きな詩を讀みし人は、散文は日記あり隨筆あり消息あり、清興に會心し來りて雅致饒かに直個無韻の詩といふも、自然のうちにあらざるを知らん、満谷國四郎氏の彩筆に成る繪畫も、數言の『白玉姫』の紛裝として以て誇るべきを信ずる也。

類書歌詩版藏堂淵文尾金

岩野泡鳴著

眞想 海堡技師

定價金四十錢
郵 稅 六錢

こは悲劇に非ず喜劇に非ず、また在來の夢幻劇にも非ず、乃ちその組織より云へば劇界に別名を附すべき眞想劇也、且著者多年の工風により、劇詞に俗語體の韻文を用ゐたれば、また新體詩界に一生面を開くものといふべし、而して之が主人公なる海堡技師の心底を讀むに至るは、世の辛酸を嘗め盡せる人と雖も、必ず微笑語ある所あらん、詩の難解と乳臭とを呼ぶもの乞ふ一本を購つてその如何を批判せよ。

泡 鳴 詩 集

近 定價未定
刊

ミラー野口米次郎作

劍と戀の日本

定價金四十錢
郵 稅 四錢

國風音樂會作

黃 鐘 調

近 金五十錢
郵 稅 六錢

河井醉茗作

塔 影

定價金四十五錢
郵 稅 六錢

▲一部の詩集をすら繕くこと能はざるは人生の最大不幸なり、山なる間は、大氣を養はれ、人の胸は詩に養はる、▲詩集『塔影』は河井醉茗氏が最近三四年來の傑作五十二篇より成る、清高純潔、一點脈味なし、▲偶ま化やかに語る人は、毎に花やかなる人に非ず、一時眼を射る如き文字は、又一時人を眩惑せしむるに止まる、▲『塔影』は毎に温顔を以て讀者の胸に接す、少くとも飽くことなき詩集なり。

金尾文淵堂藏詩歌書類

與謝野鐵幹作

むらさき

四版
品切

鐵幹昌子作

毒

草

三版
品切

全一冊 上製七十錢 並製五十錢

與謝野昌子作

みだれ髪

四版
品切

全一冊 金卅五錢 郵稅四錢

與謝野昌子作

小

扇

四版

全一冊 金卅五錢 郵稅四錢

昌子登美子雅子作

戀

衣

三版

全一冊 金四十錢 郵稅四錢

金尾文淵堂藏繪畫書類

明治三十八年度

白馬會紀念畫集

新刊

全一冊 定價金九拾錢 郵稅不要

明治三十八年度

太平洋畫會畫集

賣切

全一冊 定價金六十錢

小林萬吾筆

風景水彩畫帖

近刊

全一冊 木板 定價未定

小林萬吾筆

人物水彩畫帖

近刊

全一冊 木板 定價未定

中澤弘光筆

富士十二景

近刊

全一冊 木板 定價未定

菊池幽芳原作 鏑木清方畫
溝口白羊作歌

己が罪の歌

クロス綴美本 定價四十錢 郵税四錢

既に童幼の口にも噂々せる『己が罪』の歌は出てたり、これ幾多人士の渴望したりしものなり、原作は一度新聞紙上に現はれてより其名四方に喧傳し幾度か劇に上せられて天下を惱殺し盡せる小説なり、箕輪環の煩悶、塚口虔三の悔恨、櫻戸子爵の高潔、何れが當代人士の胸に新らしき追想を呼び起さる、先に『不如歸』『金色夜叉』に詩筆の妙を知られ抒情の靈腕に一代の青年子女を酔はしめたる溝口白羊氏、今や益々圓熟し彫琢せられたる筆を走せて此小説を詩賦す情思纏綿の趣は茲に清新の形を備へて現はれたり情掬み給へや『己が罪の歌』の清き泉に

大阪市東區南渡邊町

發 兌 元 杉 本 書 店

明治三十二年十一月十五日印刷
明治三十二年十一月二十日發行
明治三十九年五月一日三版

幕笛集
金六十錢

著 作 權 有

著 作 者 薄 田 淳 介
發 行 者 東 京 市 京 橋 區 五 郎 兵 衛 町 貳 拾 貳 番 地 金 尾 種 次 郎
印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 西 紺 屋 町 二 十 六 七 番 地 佐 久 間 衛 治
印 刷 所 東 京 市 京 橋 區 西 紺 屋 町 二 十 六 七 番 地 株 式 會 社 秀 英 舍

發 兌 元 東 京 市 京 橋 區 五 郎 兵 衛 町 二 十 二 番 地 金 尾 文 淵 堂

發 賣 元 大 阪 市 東 區 南 渡 邊 町 杉 本 書 店

文淵堂發兌圖書賣元

東京市神田區表神保町

東京堂書店

東京市神田區裏神保町

上田屋書店

東京市日本橋區吳服町

北隆館書店

東京市京橋區尾張町二丁目

東海堂書店

東京市京橋區中橋廣小路六番地

前川文榮閣

久留米市米屋町

菊竹金文堂

名古屋市宮町一丁目

星野文星堂

